

都の食材

—平安京右京七条一坊七町跡の調査成果から—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した「小魚口」木簡



写真2 出土したアワビ

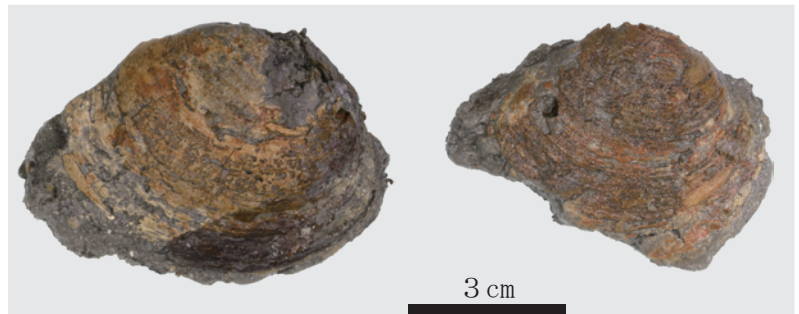


写真3 出土したハマグリと考えられる二枚貝

はじめに 2024年4月から5月に京都市中央卸売市場第一市場の施設整備に伴って発掘調査を実施しました。当地は、平安京右京七条一坊七町跡にあたり、北は左女牛小路、東は西坊城小路、南は七条坊門小路、西は皇嘉門大路に画されています(図1)。

七町の居住者や施設利用については、史料上では確認できません。『拾芥抄』西京図によれば、七町に近接する三・四町には、外国使節を迎えるための西鴻臚館が存在し、九・十町には、11世紀に権中納言源経信の所領が存在しました。また、十三・十四町は、西市の外町にあたります。

調査地は平安京の官営市場である西市にほど近い場所に位置していました。西市は平安時代中期以降は衰退し、姿を消しますが、昭和2年(1927)に京都市中央卸売市場が開設され、当地周辺は再び京都の食生活を支える場所となり、現代に至ります。

平安時代前期の井戸を発見 調査では、江戸時代に行われた粘土採掘のために古い時代の遺構はほとんど失われていることがわかりましたが、平安時代前期の井戸が残されていました(写真4)。井戸は深さ約1.7m、木枠の一边の長さは約1.1mあり、これは一辺0.9mの標準的なサイズの井戸よりもやや大

きいものです。井戸枠内からは、9世紀前半の土器が出土しました。このことからこの井戸は、平安京遷都後、間もない時期に使われていたことがわかりました。

「小魚口」木簡の出土 この井戸からは、遺存状態が良好な木簡・斎串・箸・櫛・曲物等の木製品も出土しました。木簡には、片面に「小魚口」の墨書があります(写真1)。残念ながら墨が薄く、口の文字は解読できませんでした。大きさは、長さ4.8cm・幅1.6cm・厚さ0.3cmと小型で、短冊形をしています。樹種はヒノキです。木簡の上下には左右から切り込みが入れられています

が、これは木簡を物品にくくりつける際に紐をかけるためのものです。このことからこの木簡は、物品管に用いられる付札つけふだの可能性があります。「小魚」と記した木簡の出土は、平安京では初めてです。一般的に地方から都へ送る荷物に付けられる荷札木簡の場合、各地の産物のほかにそれらを納めた地域の地名などが記されますが、これは物品名のみを小型の木簡に記していることから、京内で書かれた可能性が考えられます。

平安京内最古のアワビ さらに井戸からは、アワビ、ハマグリの可能性が高い二枚貝などの貝類も出土しました（写真2・3）。出土したアワビはクロアワビで、サイズは12.6cmあります。平安時代中期に編纂された『延喜式』には、税物としてアワビが貢納されたことが記載されています。アワビ（鮑・鰆）を貢納する地域は、志摩国（三重県）、安房国（千葉県）、佐渡国（新潟県）、隠岐国・出雲国（島根県）、長門国（山口県）、阿波国（徳島県）、

西海道（九州地方）があり、朝廷に神饌・供御・饗宴用として貢納されてきました。井戸から出土したアワビの産地は不明ですが、いずれかの地域から貢納されたのでしょうか。

貝類の殻は日本の酸性土壌では残りにくいことから、これまでに平安京内から出土した貝殻は中世以降のものが圧倒的に多いです。また、アワビのように軸部を持たない巻貝は特に残りにくく、本例の9世紀前半のアワビは、平安京内における最古の出土事例となりました。井戸内の土を篩ふるいにかけた結果、クリ・ウメ・コムギ・ムギ類・穀類・メロン類・ナスなどの食用となる植物が出土しており、貝類も食用とした可能性は充分に考えられます。

ただし、井戸からは祭祀具である斎串なども出土していることから、アワビは供物として使用されたものかもしれません。

おわりに 井戸から出土した木簡に記された小魚の魚種は不明ですが、この宅地内で札を付けて収蔵・管理されていたのでしょうか。あるいは、小魚が市に集積され、その後仕分けされて、荷物に札が付けられたまま当地に届けられたのでしょうか。当時の物流形態の一端を示す資料です。

また、貝類や植物遺存体の出土からは、当時の平安京における食物利用の一端を窺い知ることができます。当地の住人は、アワビ・ハマグリなどの海産物も食材として取り入れ、豊かな食生活を送っていたのかもしれません。

（小檜山一良）

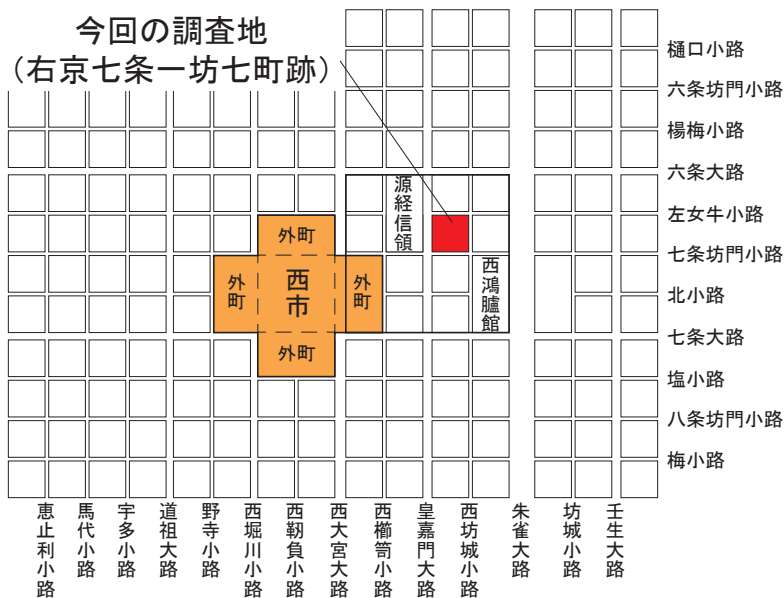


図1 今回調査した場所



写真4 木簡・アワビが出土した井戸（南西から）